

機関番号：31308

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520512

研究課題名（和文） 多読による基礎英語力の伸びと到達度シミュレーション

研究課題名（英文） A Simulation of the Development and Attained Level of Basic English Comprehension through Extensive Reading

研究代表者

日野 博明（HINO HIROAKI）

石巻専修大学経営学部・教授

研究者番号：00189797

研究成果の概要（和文）：簡単な英文を読む多読について、基礎英語力との関係を3年間にわたり検討してきたが、意識の面・英語に対する姿勢の面では大きな変化が見られたが、筆記試験などの数値的に有意な変化を確認することはできなかった。これは、最長でも2年しか多読する時間がなく、授業内でしか多読に取り組まなかった学生も少なくなかったため、読書量が十分ではなかったためだと思われる。今後は情意面での有意差を確認する手法を検討していきたい。

研究成果の概要（英文）：We have examined a relationship between English extensive reading and students' English performances for three years. Although considerable changes have been observed as for affective aspects, such as students' motivation and attitudes toward English, the results of paper tests have not showed statistically significant difference before and after the extensive reading program. This may be because the amounts of reading were not enough, for they read extensively for a maximum of two academic years, and many of them read English only in classes. Hereafter we would like to examine ways and means to check affective aspects statistically.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：外国語教育

科研費の分科・細目：

キーワード：基礎英語力、多読、到達度シミュレーション、項目反応理論

1. 研究開始当初の背景

平成11年に学習指導要領の改正が行われ、平成14年度から実施されているゆとり教育による英語の学力低下は著しいものがあり、中には中学校で習得しているはずのアルファベットの順序すら確実ではないにも

かかわらず、高等学校を卒業しているという大きな矛盾が存在している。また、中学校から高等学校にかけての英語の授業を単なる苦痛の時間としか考えられない生徒が相当数いることも、石巻専修大学の在学生からの聞き取り調査から類推できる。英語の授業に

は嫌悪感があるが、英語自体には興味を示す学生も多く、この潜在的な意欲を実行に移す手段が必要とされている。

このような従来の外国語教育を補完するものとして、多読がある。数多くの書物を平易なものから徐々に難度を上げて読んでいく多読は、Richard R. Day らによって” Extensive Reading in the Second Language Classroom” にまとめ上げられている。しかしながら、翻訳されたのは、平成18年7月のことであり、その内容が周知されているとはいえない状況にある。また、国内での実験的な実施も、最初の1年間の指導が大学・工業高等専門学校・高等学校・中学校の一部で行われているだけ（酒井邦秀他著「教室で読む英語100万語」）であり、本学でも昨年より大縄が実施しているが、学習効果、能力の伸びの評価等に関しては、まだ検討の端緒についたに過ぎない。

2. 研究の目的

研究代表者は、石巻専修大学の教養教育検討委員会の一員として、教養教育の現状分析と来るべき受験生全入時代の教養教育のあり方を検討しているところであるが、その中でも、英語の学力がその後の専門教育に際しても大きな障害になっている事を認識した。その改善方法を模索する中、自分自身を実験台として平成16年度から開始している多読の可能性に着目し、その手法についての評価を検討中である。この方法を一般的にするためには、どの程度読めば学力が伸びるのかといった目安がどうしても求められてくる。そのためには、多くの学生に多読を実践してもらい、そのデータをデータベース化し、統計処理する事によってそれぞれに適切な多読方法の確立を行い、さらに今後の到達度のシミュレーションを行う事により、8割以上の学生が意欲を持って多読をしていける指針を作っていくのが目的である。

3. 研究の方法

(1) 多読用資料のレベル分け

①多読資料を日本多読学会のデータベースを基にレベル分けする。レベルを書いたシールを各資料に貼り付ける。日野、大縄担当

②レベル分けした資料のタイトル、ISBNをデータベースに入力する。また、多読学会のデータベースに登録されているものについては、語数のデータを転記する。日野、大縄担当

具体的データの入力についてはアルバイトに依頼する。

③学生が読んだ資料の評価・感想を確認し、それぞれの資料のレベルを再検討する。大縄、日野担当

④学生の評価により、それぞれの資料の再評

価を行う。大縄、日野担当

(2) 学力チェック

①既存のTOEIC Bridge、ACE等の試験の内容を精査し、本大学の学生に適する難易度か、講義時間内に実施可能か、リーディング、ライティング、ヒアリング、語彙、文法等のバランスはどうかの確認を行う。大縄担当

②既存のテストが使えない場合には、大学入試センター試験等の試験内容を参考にし、自作も視野に入れる。大縄担当

③上記で選定したテストを多読前、前期終了時、後期終了時に実施し、それぞれの能力のデータを得る。大縄、日野担当

(3) 学生へのアンケート調査とグループ分け

①多読の要素として考えられる読書習慣と、英語に対する意識をアンケート調査する。大縄、日野担当

②調査を元に読書習慣の有無、英語が好き嫌いのそれぞれ2つのカテゴリーに分け、計4つのグループを作る。なお、このグループ分けは、学生には知らせない。日野担当

(4) 学生の読書データの記録

①レベル分けした多読用資料データベースと履修登録している学生の学生証のデータベースをノートパソコンにコピーする。日野、大縄担当

②学生証のバーコード部分を同様にバーコードリーダーで読み取り、履修登録学生の氏名を検索し、日付、学籍番号と共に記録する。日野、大縄担当

③資料のISBNデータをバーコードリーダーで読み取り、そのデータを多読資料データと照合して、タイトル、レベル、語数を検索して記録する。日野、大縄担当

④バーコードからデータを読み込み、データベースにアクセスして該当データを取り出すソフトウェアを開発する。日野担当

(5) 講義内外での多読

①(3)で行ったグループ分けで講義時間内、貸し出しによる自宅での多読を実施し、その簡単な評価・感想を求める。大縄、日野担当

②レベルの順番どおりに読むグループとレベルに関係無く読むグループが観察されるはずなので、それぞれに対して適切なアドバイスを与えて多読を進める。大縄、日野担当

4. 研究成果

(1) 基本となる多読資料の読みやすさレベルの分類、語数カウントの転記、バーコードラベルの貼り付け等はほぼ終了している。

(2) 実際の多読の実践も順調に進んでいる。

自分に合っていると思われるレベルの本を自由に選択し、読む。その際、自分の実力以上と感じていそうな場合には、別な本を読むことをアドバイスしている。ここでは、毎分100語程度の読書スピードを目安としている。ただ、個人による差も大きいので、全員一律には適用していない。

(3) 多読の記録もデータとして蓄積し、延べ250人程度の記録となっている。ここで、自分の読んだ本のタイトル、語数、読みやすさレベル、バーコードの記号とともにその本に対する一言を書いている。本の内容を理解できているかどうかの目安として、この一言も参考にしている。

(4) 基礎英語力を確認するため、TOEIC Bridge 等の外部テストの模擬試験問題を検討した。現状では、TOEIC で評価できるほどの英語力ではないと判断し、TOEIC Bridge を基本に考えることとした。

(5) テスト間の難易度を吸収するために項目反応理論の導入を行った。全体の人数が多くないため、完全な客観性は期待できないが、内部での比較には十分利用できることが分かった。

(6) 読書スピードの確認のため、最終年度には200語程度の文を読んで内容についての質問に答えてもらうチェックを始めた。やや難易度が高いため、当初は相当に時間がかかっていたが、終盤には、ほぼ全員が毎分100語程度で読めるようになっている。

(7) 多読を行う際に英語に対する感じ方や読書の姿勢をアンケートで調査し、多読本の購入や実際に読む場合のアドバイスに利用している。

筆記試験等での顕著な成長(有意な差)は観察されなかった。これは、成長の度合いが読了後数に対してシグモイド関数のように成長していくと期待していたが、今回の結果では、変化の少ない停滞部分で学生が履修できる2年間が過ぎ、研究を取りまとめなくてはならない時期になってしまったことが考えられる。これは、もう少し継続して、観察していくことが必要と考える。

しかし、意識の面では大きな変化が見られた。それまで、苦手意識から、「英語を見るのも嫌だったが、多読を始めてから、それほど苦にならなくなった」と話す学生もおり、多読の効果が大きいと感じられる。この面での変化をどう扱っていくかの検討を行う必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

① 大縄道子、英語の苦手意識克服を目指し

て——石巻専修大学における英語多読・多聴授業の実践報告、石巻専修大学研究紀要、査読無、22号、2011、pp. 87-98.

[学会発表] (計 件)

[図書] (計 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計◇件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

日野 博明 (HINO HIROAKI)

石巻専修大学・経営学部・教授

研究者番号: 00189797

(2) 研究分担者

大縄 道子 (OHNAWA MICHIKO)

石巻専修大学・経営学部・准教授

研究者番号: 80336502

(3) 連携研究者

()

研究者番号:

